北海学園大学

日本語教員養成課程

『報告書』第 10 号

北海学園大学
2025 年 3 月

目　次

2024 年度の日本語教員養成課程を振り返って
日本語教員養成課程委員　丸島　　歩 …… 2

日本語教育特別演習（国内実習）…… 3

2024 年度「日本語教育特別演習」を終えて
人文学部日本文化学科 4 年　大沼　乃愛（実習生）…… 6

「日本語教育特別演習」を終えて
文学研究科日本文化専攻修士課程 1 年　藤野戸柾希（TA）…… 8

「日本語教育特別演習」での留学生とのワードウルフ活動に参加して
人文学部英米文化学科 4 年　中川　弥乃（協力学生）…… 9

ウェリントン高校留学生への日本語レッスン体験…… 10

おにぎり（作文）　ウェリントン高校　ネイサン・ミクファーソン …… 11

日本語ボランティア活動を終えて　法学部法律学科 3 年　尾家美乃里 …… 12

ウェリントン高校からの留学生との日本語レッスンを終えて
人文学部日本文化学科 1 年　山谷　月夢 …… 13

ウェリントン高校からの留学生との日本語レッスンを通じて
人文学部日本文化学科 1 年　横田　大武 …… 14

「ぺらぺらすいようび」学生サポーター…… 15

「ぺらぺらすいようび」を通じて　人文学部英米文化学科 4 年　中村　こち …… 16

「ぺらぺらすいようび」活動報告　人文学部英米文化学科 4 年　島谷　俊輝 …… 17

「ぺらぺらすいようび」の活動を通して
人文学部日本文化学科 3 年　伊原　綾花 …… 18

「ぺらぺらすいようび」と出会って　人文学部英米文化学科 3 年　小野　乙寧 …… 20

オンライン日本語交流会…… 21

日本語オンライン交流会に参加して
人文学部英米文化学科 3 年　鬼頭　沙季 …… 22

遠隔授業見学（大阪大学日本語日本文化教育センター）…… 23

2024年度の日本語教員養成課程を振り返って

日本語教員養成課程委員　**丸島　　歩**

2024年度の日本語教員養成課程は、交流と学びのための新しい環境づくりを試み続けた1年であったと言えるでしょう。

本課程が開講している実習科目である「日本語教育特別演習」では、これまで、国内外の日本語教育機関の授業の場をお借りする形で実習生を受け入れて頂いていました。今年度は初めて、日本語学習・交流プログラムを実習生と教員が協働して構築し、近隣の日本語学校の留学生に参加していただきました。これは、課題遂行型の教育を重視する近年の日本語教育の動向への対応と、地域の日本語学習者と本学の学生の交流の場づくりを見据えたものでした。

授業外においても、学生が日本語学習者と関わることができる機会を新しく設けました。5月下旬から7月初旬にかけて、系列校である北海高等学校・北海学園札幌高等学校に短期留学したニュージーランドの高校生を招き、教員と学生とで日本語レッスンを、計30コマにわたり実施しました。また、韓国のカトリック関東大学校の教養科目として設置されている入門レベルの日本語クラスとオンラインで繋ぎ、日本語練習の補助と交流を行う活動を春と秋に計5回行っています。

学外との新たな連携も、学生の幅広い学びに繋がったことと思います。2024年5月に札幌国際プラザが開始した交流事業「ぺらぺらすいようび」に、日本語教育や多文化共生に関心のある学生がサポーターとして参加しています。本課程は、札幌国際プラザと本学の学生を繋げる役割を担いました。多様な背景を持つ学習者との交流やその場づくりを通して、学生たちは札幌に滞在する外国人への理解を深めたようです。また、今年度から本課程は、大阪大学日本語日本文化教育センターの日本語・日本文化教育研修共同利用拠点事業・教育実習指導事業に申請しています。これにより、本学の学生は同センターで実施される日本語授業の遠隔見学ができるようになりました。

第12号には、これらの活動の概要と関わった学生の報告レポートを掲載しています。学生たちの多様な学びを感じ取っていただければ幸いです。

最後に、これらの活動はすべて、学内外の関係者の方々の協力がなければ実現しなかったものばかりです。学びの機会を与えてくださった皆様に感謝申し上げます。

日本語教育特別演習（国内実習）

日本語教育特別演習は、日本語教員養成課程および人文学部の開講科目で、学外の日本語学習者に日本語を教授することを通して日本語教育の実践的な力を身に付けることを目的にした科目である。

2024 年度は人文学部 4 年生 1 名が履修し、大学院文学研究科の大学院生が TA として携わった。

近年の日本語教育の動向を見据えた演習を展開し、本学の学生と地域の留学生の交流の機会を設けるために、課題遂行型の実習授業と、本学の学生との交流会を組み合わせたプログラムを実施した。

次ページ以降にプログラムの概要と、実習生、TA、協力学生のレポートを掲載する。



1. プログラムの概要

- プログラムの目的：本学人文学部専門教育科目・日本語教員養成課程開講科目「日本語教育特別演習」の一環として、課題遂行型の日本語授業を計画・準備し、実践の機会を得ることが目的である。同時に、参加留学生が日本語の会話能力を向上させるとともに、母語話者との交流を通じて実践的なコミュニケーションスキルを身に付けることを実習授業の目的として設定している。
- プログラムの特徴：対話型ゲーム「ワードウルフ」を活用し、貴学の留学生と本学学生の交流を行なう。ゲームを遂行するための日本語表現を習得するための授業を事前に実施する。
    - ワードウルフとは：少数派と多数派に分かれ、雑談の中で少数派を見つけ出すソーシャルコミュニケーションゲーム。コミュニケーション能力の向上やチームビルディング等を目的に、企業の社員研修等でも活用されている。
- 学習目標：①事物の特徴を描写できるようになる、②根拠とともに自分の意見を言えるようになる、③他者の意見を聞き、賛成あるいは反対の意見を表明できるようになる
- 対象：日本語学校の留学生（A2〜B1 レベルを想定）、本学学生（実習生、TA、日本語教育に関心のある希望者）
- 実施内容：レッスン（約 45 分）、交流会（約 45 分）

2. スケジュール

（前半 45 分）語彙・表現の学習と練習

- 進行・ルールの確認
- お題として与えられた語の特徴を話すための語彙や表現の学習、練習
- 「ウルフ」を特定するための意見交換に必要な語彙や表現の学習、練習
- ルールの再確認とゲーム進行の練習

（後半 45 分）ゲームを通した母語話者との交流

- 母語話者を含めた数名ずつのグループに分かれ、互いに自己紹介をする
- ワードウルフをプレイする
- 全体での振り返り

3. 開催日時・場所

- 第 1 回：10 月 28 日（月）14：00〜15：40
    - 場所：北海学園大学 7 号館 D51 教室
    - 参加留学生：札幌ランゲージセンターの留学生 14 名（初中級クラス）
    - 本学の協力学生：7 名

- 第 2 回：11 月 8 日（金）13：00～14：40 ごろ
  - 場所：札幌青葉鍼灸柔整専門学校日本語学科
  - 参加留学生：札幌青葉鍼灸柔整専門学校日本語学科の留学生 14 名（A2 レベル）
  - 本学の協力学生：1 名



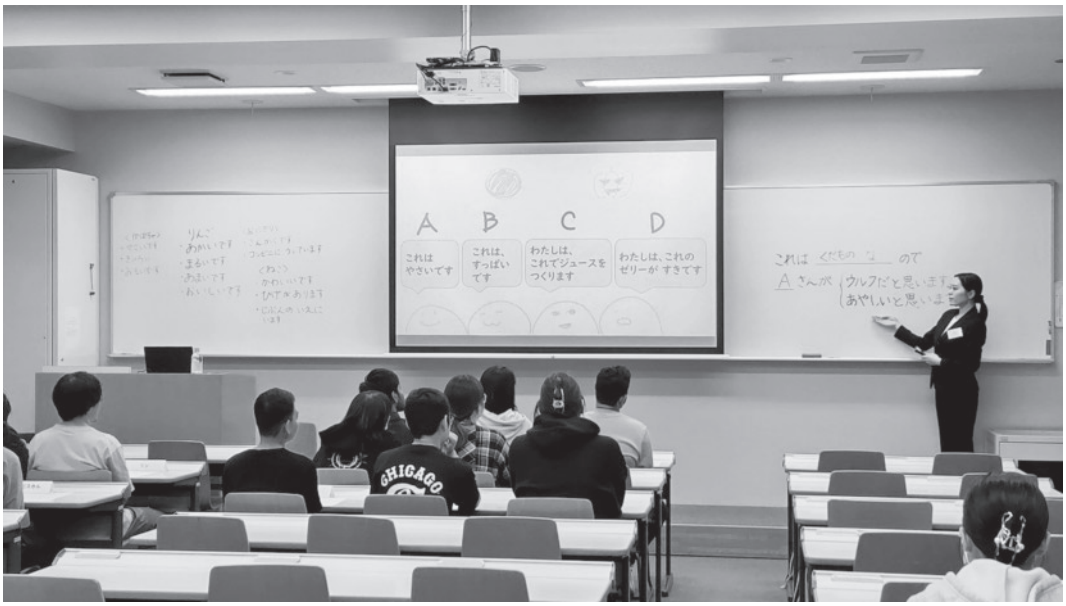


2024 年度
「日本語教育特別演習」を終えて

人文学部日本文化学科 4 年　**大沼　乃愛**（実習生）

2024 年 10 月 28 日と 11 月 8 日の 2 回にわたる実習に参加した。これまで「日本語教授法」の講義の中で教案の作成や 20 分程度の模擬授業を経験していたが、実際に日本語学習者の前で授業をするのは今回が初めてであった。まずは、どのような内容で授業を進めるのかについて決めるところから始まった。楽しく学ぶことのできるものとして、ワードウルフを提案した。また、ワードウルフは、語彙力が求められると同時に、誰がウルフかを議論する時間が設けられている。この特性から「話すこと」を中心とした授業を目指すことに決めた。教案とスライドの作成に時間がかかってしまい、不安なスタートであったが、丸島先生や TA の方と予定を合わせて何度も練習を繰り返していくうちに少しずつ改善していくことができた。最初の練習では、丁寧な敬語を意識していたせいか話し方が堅くなっていたため、ジェスチャーやカード、スライドの絵などを用いることで堅苦しさは徐々に改善された。当日行った授業の流れは、次の通りである。

① アイスブレーキングでワードウルフに触れ、ルールが書かれたプリントを配布する。
② プリントと同じ内容のスライド（パワーポイント）を用いてルール説明をした後、実習者と丸島先生・TA の方含む 3 人でワードウルフの見本を実演する。



③　例文をもとに、ワードウルフで必要な表現や会話の練習を繰り返す。
④　5 人程度のグループに分け、そこに実習者や協力者の日本人学生などを交えて 3〜4 回ほどワードウルフを行なう。

ワードウルフのお題については、「りんご・トマト」「犬・猫」「水族館・動物園」「スーパー・コンビニ」といった、共通点の多い 2 つの単語を設定した。学習者が悩んでいた際には、ウルフを見つけやすいようなヒントを黒板に書くなどの対応をとった。また、1 度目の実習では、ワードウルフを数回行った後に絵馬が印刷されたプリントを用いて願い事を書く時間があった。これは丸島先生に提案していただいたものであったが、想像以上に学習者たちも楽しく願い事を考えていた。「―ますように」といった願い事の書き方については、丁寧に説明することが困難であったが、困っている学習者に話しかけるなどしてなんとか伝えきることができた。今回の実習を通して、授業は自分一人では成り立たないということを一番に学んだ。丸島先生や TA の方には準備段階からご指導いただき、当日はさらに日本人学生の協力と学習者たちの積極的な参加姿勢により、スムーズに授業を行うことができた。このような貴重な経験を忘れず、今後も日本語を教えることに携わっていきたい。

「日本語教育特別演習」を終えて

文学研究科日本文化専攻修士課程１年　**藤野戸柾希**（TA）

2024 年度の日本語教育特別演習では TA として参加し、受講生のサポートなどの補助業務を行った。昨年度は受講生として日本語教育特別演習を行なったが、今年度はまた別の視点から多くのことを学ぶことができる機会であった。

今回 TA として行ったことは、受講生が作成した資料に対する提案や、教案や模擬授業に対する助言、実習当日の補助などである。今年度は受講生が１人だったため、指導教員の丸島先生と私を含め３人であった。受講生の模擬授業を何度か見学し、その都度、丸島先生と私とで提案や助言を行った。まだ日本語教育の実践は少なく、TA も初めてであった。そのため、受講生に対して参考になることが言えるかどうか不安であったが、回数を重ねるうちに手探りながらも、昨年度行った実習の反省や日本語学校での授業の経験を活かしてサポートを行うことができた。また、今年度の実習は自分があまり実践したことがない形式であった。しかし、受講生が作成した教案と模擬授業の様子、それに対する丸島先生の指導を見て、新たな知見を得ることができた。

実習は学内と市内の専門学校とで、それぞれ１回ずつ行われた。今回の実習内容は、日本語学習者同士で日本語を使ったゲームであった。学内の実習では、多くの学部生に参加していただいたため、自分はその様子を見たり、時にサポートしたりなどを行った。市内の専門学校で行った実習では、実際に自分も参加し、学生と楽しく交流することができた。受講生の実習の様子も見ても、授業の流れや柔軟な対応など、参考になることが多かった。

TA が始まる前は、TA の役割は受講生のサポートが主であったと考えていたが、自分自身も日本語教育について改めて考え直し、今後の日本語教育の実践に役立てることができる貴重な機会であった。また、１つの授業を作り上げる過程を客観的に見ることができるのは滅多にない。初めての TA であったが、どれをとっても得難い経験であり、多くのことを学ぶことができた。

今回の TA では、受講生に対する助言や提案がうまく自分の言葉でまとめられず、漠然とした回答になってしまうことがあったが、また TA をさせていただく機会があれば、この反省を活かして、より良い演習となるように尽力していきたい。

「日本語教育特別演習」での留学生とのワードウルフ活動に参加して

人文学部英米文化学科４年　**中川　弥乃**（協力学生）

先日、日本語教育特別演習の一環で、留学生とのワードウルフ活動に参加しました。この活動は、座学で学んできた日本語教育の知識を実際の授業で体験する貴重な機会となりました。

ゲーム開始当初は、参加者一同緊張していたためか、ヒントが似通ってしまう場面が多く、ウルフを見つけるのに苦労しました。しかし、ゲームが進むにつれて、それぞれが異なる視点からユニークなヒントを出すようになり、ゲームは白熱していきました。

特に印象的だったのは、各国の文化や価値観が反映されたヒントの出し方でした。例えば、「ウルフ」に犬、「その他」に猫のカードが配られた際、猫のカードを持つ学生が「私の国では、この動物はミルクが好きな動物とされています」とヒントを出していました。このように、各国の学生が自国のイメージをもとにヒントを出すことで、文化の違いを垣間見ることができ、多様な視点から物事を捉えることの重要性を改めて認識しました。

また、活動開始前のルール説明の際から、学生たちが積極的に質問し、発言していたことも印象的でした。異文化理解への関心の高さが、積極的な姿勢に繋がっていると感じました。

今回の活動を通して、これまで理論的に学んできた日本語教育の知識を、実際の授業の中で体験することができました。特に、実際の雰囲気を肌で感じることができた点は大きな収穫でした。理論だけではイメージがつかみにくかった部分が、この実践的な活動を通じて具体的に理解できるようになりました。

この経験を活かし、今後日本語教育に携わる際には、このような実践的な活動を積極的に取り入れることで、学習者のモチベーションを高め、より実用的な日本語能力の向上に繋げていきたいと考えています。

ウェリントン高校留学生への日本語レッスン体験

本学の併設校である北海高校学校・北海学園札幌高校学校に留学生として滞在した、ウェリントン高校（ニュージーランド）の高校生２名の日本語レッスンを、本課程の教員と学生が担当した。

レッスンの概要は以下のとおり。

- 期間：2024 年 5 月 22 日（水）～7 月 3 日（水） 計 30 コマ（1 コマ 45～50 分）
- 参加学生数：計 11 名
- レッスン内容：留学生のレベルやニーズを把握しながら学習内容や教材を選択した。具体的には、トピックシラバスによる初級会話、行動中心アプローチによる初級会話、初級文法の導入とコミュニカティブ・アプローチによる口頭練習、初級漢字、作文、フリートーキング等を実施した。

次ページ以降に、学習の成果としての留学生の作文と、参加学生３名のレポートを掲載する。



おにぎり（作文）

ウェリントン高校（ニュージーランド）　**ネイサン・ミクファーソン**

一番好きなおにぎりは、ファミリーマートの海老おにぎりです。鮭とツナの味もあります。

セブンイレブンはツナおにぎりもあります。そして、みそピーナッツおにぎりとうめぼしおにぎりがあります。でも、みそピーナッツおにぎりとうめぼしおにぎりは、変な味だと思います。すっぱいものが好きじゃないから、うめぼしおにぎりが大きらいです。

だいたい毎日おにぎりを食べます。ときどきホストマザーがおにぎりを作ってくれます。



（中央が本人）

〈ウェリントン高校留学生への日本語レッスン体験〉

日本語ボランティア活動を終えて

法学部法律学科３年　**尾家美乃里**

私は今年から日本語教員養成課程を受講し始めました。法学部であったため、これまで日本語に関する授業を受けたことはなく、日本語学習者と交流したことはありませんでした。そのため、今回のボランティア活動は、私にとって初めて日本語を使って日本語学習者と交流する貴重な機会となりました。レッスンは主に丸島先生が教材を用いて留学生に日本語を教え、学生ボランティアと留学生がそこで習ったことをもとに会話練習をするという形で進められました。留学生はいつも意欲的にレッスンに取り組んでおり、レッスンで習った日本語の表現を正しく使えた時の留学生の嬉しそうな様子を見ると、とてもやりがいを感じ、私自身も嬉しくなりました。また、ボランティア活動を通して、日本のアニメが好きな留学生には教材としてそのアニメの漫画を使うなど、生徒一人ひとりに合わせた丸島先生の指導方法も学ぶことができました。さらに、留学生の母国と日本の文化や習慣の違いについて理解を深めることができ、大変勉強になりました。

今回のボランティア活動で得た経験を活かし、今後も日本語学習者のサポートができるよう、日本語ボランティアをはじめとするさまざまな活動に積極的に参加していきたいと思います。



（左が本人）

〈ウェリントン高校留学生への日本語レッスン体験〉

ウェリントン高校からの留学生との日本語レッスンを終えて

人文学部日本文化学科１年　**山谷　月夢**

私は2024年5月から行われたウェリントン高校からの留学生の日本語レッスンに参加させていただきました。日本語レッスンについてはこれまで経験がなかったため、緊張しました。まず初めに抱いた印象は、日本語を伝えるのが難しいということです。母語である言語を、文法を用いて説明することの難しさを感じました。文法に基づいて日本語を考えると、思っていた以上に複雑で、混乱しそうになることが多々ありました。しかし、日本語の文法について考えている内に、改めて日本語の不思議な部分に気づくことができ、面白かったです。

また、会話形式で練習するときに、自分自身が日本の文化についてあまり知らないことに気が付きました。日本の祝日やひな祭りなどの行事をうまく説明できず、もっと日本について知らなければならないと感じました。会話をする上で、相手の国に関して質問することも、会話を続けるきっかけになることもわかりました。

実際の日本語レッスンの様子を間近で体験できたことで、今後克服すべき課題も見つかり、自分にとって良い経験になりました。日本語教員養成課程で身につけたいことや意識したいことを自分なりに考えるきっかけとなったので、とても良かったです。



（左が本人）

ウェリントン高校からの留学生との日本語レッスンを通じて

人文学部日本文化学科１年　**横田　大武**

2024年５月から７月までの約１ヶ月半、ウェリントン高校からの留学生との、日本語レッスンの活動に参加しました。この活動では、日本語での会話を中心としていたということもあり、日本語教育に関する知識がまったくない１年生である私にとっても、とても有意義な活動となりました。

この活動では、先生が用意してくださった教材をもとに勉強するほか、留学生との積極的なコミュニケーションを通じて、日本語レッスンをしていました。いままで日本語教育に触れたことがなかった上に、ほとんど留学生との会話もしたことがなかった私にとっては、先生や先輩から学ぶことも多く、とても刺激的な時間を過ごすことができました。

留学生とのコミュニケーションという面では特に、その留学生ごとに、どういった単語を使うのか、どのくらいの速さで話すのか、わからない単語がでてきたとき、どのように説明するのか、ということなどを勉強することができました。また、留学で北海道に来てからしたことや、好きなおにぎりの具、漢字の書き順について、留学生と一緒に雑談ができたのは、とても貴重な経験でした。これらに加えて、教材からも色々なことを知ることができました。私が高校まで習ってきた国語と、学習者向けの日本語との違いを見つけることは、とても楽しかったです。

この活動を通じて、日本語教育とはどのようなものなのかを、少しだけですが、知ることができたと思います。こうして得た知識と経験を、これからの学校生活や人生に、活かそうと思います。

「ぺらぺらすいようび」学生サポーター

「ぺらぺらすいようび」は、札幌に滞在する外国人がボランティアと日本語で会話をする場を提供する、公益財団法人札幌国際プラザの事業である。2024 年 6 月に始動し、札幌近郊の大学で日本語教育や国際交流などについて学んでいる大学生がサポーターとして運営に関わっている。

本学からは、日本語教員養成課程の受講生や開講科目の履修生、大学院生の計 7 名がサポーターとして活動した。学生たちにとっては、地域日本語教育のあり方や多文化共生を実践的に学ぶ貴重な場になっている。

次ページ以降にサポーター学生 4 名の参加報告レポートを掲載する。



〈「ぺらぺらすいようび」学生サポーター〉

「ぺらぺらすいようび」を通じて

人文学部英米文化学科４年　**中村　こち**

私は「ぺらぺらすいようび」を通じて、様々な地域や国から日本に来た、多様なルーツ、アイデンティティ、そして母語をもつ日本在住の日本語学習者の方々と交流してきました。「ぺらぺらすいようび」では、日本語学習者の方々が安心して、そして自信を持ちながら話せる環境作りに取り組んでおり、その結果本当に色々な話をすることができます。お互いの言語、自分の生まれ育った国、その国での習慣、自分たちの家族についてなど話題は尽きることがありません。より身近な話題では、お互いによく知る地域の美味しいレストランの情報を交換したり、おすすめの観光名所を教え合ったり、普通のスーパーではあまり売られていない海外の調味料が売られているお店を紹介したり、病院の受診方法について説明したりと、学習者の方の日本での暮らしをサポートする役割を果たすこともあります。

「ぺらぺらすいようび」の活動中には自分が今札幌という日本の中の都市にいることを忘れてしまうほどです。私はこの１年間で様々な地域から日本に来た学習者の方々と出会い、多くの学びを得ました。私がこの活動で１番大きな恩恵を感じていることは、「（国・地域）からの人」という大雑把で不的確な認識から「（国・地域）から来た○○さん」というように自分の認識を変化させてくれたことです。授業やニュースで国や地域の名前が出てきても、ただの情報として、そして国という塊としか認識できていませんでした。その向こうにある、「そこでの生活」や「そこで生きる人」について具体的なイメージができなかったからです。しかし、今はその国や地域での習慣や歴史、人々について考えることができます。国の名前を聞くと、友人たちの顔が浮かぶようになりました。もう１つの大きな学びは国の名前では人を図ることはできない、ということです。当たり前だと感じるかも知れませんが、私は日本以外の国に対して抱くイメージや偏見がどれほど無意味で暴力性を含んでいるのか、という気付きを自分が感じることで得ることができました。ニュースで不仲だと報道されている国同士の人々が日本語で会話をしている姿、反日国と煽られている国から来た人が日本語を話している姿、「この国の人々は～」という括り方は本当に何の意味も成さないことを実感しました。それぞれの個人と「人同士」のコミュニケーションをとることでしか人との関係性は築けないと学ぶことができました。「ぺらぺらすいようび」は私たち日本にルーツをもつ人にとっては、自分が経験したことのない生活を学ぶことのできる、そして学習者の方にとっては現地の日本人と話すことのできる貴重で有益な場です。ここで得た大切な気付きを今後も活かしていきたいです。

「ぺらぺらすいようび」活動報告

人文学部英米文化学科４年　**島谷　俊輝**

私は2024年８月から現在までの７か月間、札幌国際プラザで学生サポーターとして、日本語ボランティア「ぺらぺらすいようび」に参加しています。この活動は、日本語を学ぶために来日した世界各国の学習者に、日本語を使って交流する場を提供することを目的とし、毎週水曜日に開催しています。参加者は、日本語学習を始めたばかりの初級者から、日本語能力試験（JLPT）N1を取得している上級者まで、言語レベルや国籍を問わず少人数のグループに分かれて自由に会話を楽しみます。

私はこの活動を通じて日本語教員を目指す上で、自分自身の語彙力や文法理解をさらに強化する必要性を強く実感しました。また、日本の外国人労働者の受け入れ態勢には多くの課題があることにも気づき、深く考えるきっかけとなりました。特に印象的だったのは、学習者の多くが趣味ではなくビジネスのために日本語を学び、最終的に日本での就職を目指していることです。しかし、日本で働くためのハードルは非常に高く、とりわけ「言語の壁」が大きな障害となっています。日本では、「ひらがな、カタカナ、漢字、アルファベット」を使い分けながら、同音異義語を区別して生活しています。そのため、日本語学習者にとってもこれらの文字の習得は不可欠です。特に、日常生活で使用する漢字は、約2,000字にも及び、中国や台湾などの漢字文化圏以外の出身者にとっては、大きな負担になることは間違いありません。

さらに、近年のAI技術やロボット化の進展により、外国人労働者の受け入れにも新たな課題が生じています。セルフレジや配膳ロボットなどの導入が進み、単純労働の雇用機会が減少する中、日本政府は人手不足が深刻で無人化しにくい農林水産業や介護業などを中心に、外国人労働者を受け入れる傾向を強めています。しかし、学習者の多くはそのような職種に限らず、民間企業で日本人と同じように働き生活することを望んでいます。そのため、外国人労働者の受け入れの在り方と学習者が求める仕事の間にギャップが生じています。本来であれば、日本語を使いながら徐々にステップアップし、仕事に適応していくことが理想的です。しかし、単純労働の機会が減ることで、学習者がいきなり高度な専門性を求められる職業に就かざるを得ない状況に陥っているように感じます。

このような状況の変化を踏まえ、外国人労働者の受け入れにおいて、日本語教育機関の役割は今後ますます重要になると考えます。私は「ぺらぺらすいようび」での経験を活かしながら、日本語教育の在り方について引き続き学び、考えていきたいと思います。

〈「ぺらぺらすいようび」学生サポーター〉

「ぺらぺらすいようび」の活動を通して

人文学部日本文化学科３年　**伊原　綾花**

2024年５月から３月までの約１年間、毎週水曜日に日本語で外国人と会話するボランティア活動である「ぺらぺらすいようび」に参加させて頂きました。これは、札幌国際プラザ主催のもので、コーディネーターの式部先生が場を取り仕切って下さる中、会話を楽しみながら外国人参加者が日本語を練習する目的で行われています。また、学生にとっても札幌に住む外国人の生活の様子や言語・文化の違い、観光的な地域ごとの魅力、方言など、外国人がどこに興味を持つのかを知る良い経験になります。具体的な進め方としては、13個ほどのテーブルを用意し、大体日本人２人、外国人２人の４人で１テーブルにつき、会話を30分×テーブルチェンジ３回を時間を計って行います。札幌国際プラザさんが用意してくださるお茶やお菓子も食べながら、どのテーブルでも色んな話題で毎週盛り上がっていました。最後には全員が感想カードを書き、掲示板に貼っていることで、回ごとの様子が後から見てもわかるように残しています。

私は、この活動に長期的に携わらせて頂いたことで、多くの発見と学びを得ることができました。まず、札幌に来たばかりの外国人に関わる機会が今までなかったため、時期や国籍に関わらず多くの外国人が札幌に来て、生活し、日本語を学びに来ていることに驚きました。平日の昼の時間に行われているため、日本語学校に通っている人が一番多く、滞在予定の期間は１年以上、１年間、６か月、３か月、短期的な旅行と多岐にわたり、日本での就職や進学など次の目標を語ってくれる人もいました。もちろん、日本人と結婚し、札幌に移住して長い方も多くいらっしゃいました。ただ、数字で外国人居住者の内訳を見ても想像が難しいですが、この活動を通して、札幌に住む外国人の解像度が上がったと思います。

次に気づいたことは、定期的に行われている会話の場であることで、顔見知りが増え、次第に個人的な話も聞けるようになっていったことです。「○○さんですよね、もう覚えましたよ～」という声かけが学生中心に増え、外国人参加者も互いの自己紹介や自分の出身国との違いをテーブルごとにしていたところから、「実は昔バンドやってて、YouTubeとかCDもあるんです」や「在留ビザに必要な“その仕事に就くのが自分でなくてはならない理由”が難しくて悩んでる」といった相談など、初対面では中々話さないようなことも、特に年度終わりの近い１月～３月にかけて多くなっていきました。参加者の中には、「毎回参加することで、最初の時に感じていたイベント感がなくなった。でもそれは、もしかしたら日常のようで良いことなのかもしれない」と考えながら話す人もいました。人によって、もちろん感じ方や場の空気の好みはそれぞれですが、最後まで参加している人が多かったのを見ると、街中で会っても話しかけられる、友達に話したいような些細な事も日本語で話せるコミュニケーションの場は、日常にあると心の支えになるのだろうと感じました。

日本語の能力も使う中で上達しているのを感じました。最初の時期は、ホワイトボードに話した日本語をすべて書いたり、外国人参加者も翻訳機や英語などで説明したりすることが多かった印象ですが、徐々に自分のことを「日本語話すのは下手です」と卑下する人が減り、日本語をもっと自由に使えるようになった人がたくさん見られるようになったと感じています。

他にも小さな気づきや学びは、活動の中でたくさんありましたが、「ぺらぺらすいようび」という対面で日本語を話す活動が、同じ街に住む外国人を知ることにつながり、会話を通して、安心や楽しみが心の中にあったり、お互いに新しいことを学ぶことができる時間であったことは明らかでした。外国人参加者もどんどん入れ替わり、参加する学生メンバーも変化するので、今のような柔軟な体制のもとでこれからも無理なく存続していけると、札幌は少しでも外国人移住者にとって住みやすい都市になると思いました。私も引き続き、このような活動を通して、さらに札幌に住む外国人を知っていきたい所存です。

「ぺらぺらすいようび」と出会って

人文学部英米文化学科３年　**小野　乙寧**

私は大学一年生から日本語教員養成課程を履修しており、日本語教育について学んできました。その中で日本語ボランティアについての話をいただき、参加しました。国籍、年齢、性別、日本語レベルの全く違う人が毎回訪れ、最初は何を話せばいいかわからず、混乱しました。そのような中で私は相手の状況に合わせてニーズを把握し、会話を進めることを意識しました。その結果相手と話がどんどん弾むようになり、毎回の活動が少し辛かったのが、楽しくなりました。

その中でも、私が一番この活動を続けてよかったと思う理由は、台湾人と仲良くなれたことです。私は元々韓国が好きで、韓国語を勉強していました。そういうわけで、英語、中国語には全くと言っていい程興味がなかったのがその時の本音でした。しかし、台湾人の一人の参加者と仲良くなり、連絡先を交換しました。彼が同じ台湾の留学生を私に紹介し、どんどん台湾人の友人が増えました。台湾の文化はとても面白く、供食（一起吃飯）を大事にしていて、みんなでごはんを食べることが大好きで、私もよく参加して一緒に楽しみました。それ以外にも、女性の立場がとても強かったり、何より意見があるときは直接伝えることを大事にしており、日本人のように間接的に柔らかい表現をしません。これは台湾特有の考え方で、直接伝えた方が相手に親切だ、と考えられている、と友人は言っていました。いつも周りの目を気にする性格であった私にとって、この考え方はすごく新鮮で、自分の性格を見直すきっかけともなりました。

このように、元々韓国が大好きだった私が、数か月ですっかり台湾の魅力に夢中になり、今では中国語を勉強しています。漢字文化なので簡単かと思いきや、発音があまりにも難しく、苦戦することが多いですが、それも楽しいです。台湾の食べ物であったり、景色が好きなのもありますが、何より台湾の国民性が大好きです。このぺらぺら水曜日で、私の人生がこんなに変わるとは思ってもいませんでした。この活動が来年も続くかわかりませんが、外国人と触れあうことが好きな人はもちろん、様々な国籍の人が訪れるため、様々な価値観にふれあい、自分の価値観を考え直す良いきっかけになるかもしれないと、私は考えています。

オンライン日本語交流会

海外で日本語を学ぶ大学生と、オンラインで交流を行った。韓国・江陵市にあるカトリック関東大学校で教養科目の日本語を学ぶ学生である。日本語ネイティブと交流の機会のない学習者にとっても、ほぼゼロ初級に近い学習者と関わる機会がほとんどない本学の学生にとっても、新鮮で貴重な経験になったようである。

次ページに参加学生１名の感想レポートを掲載する。

日程

- 第１回：2024 年 4 月 8 日（月）18：30〜19：00　参加者 4 名
- 第２回：2024 年 4 月 29 日（月・祝）18：30〜19：00　参加者 4 名
- 第３回：2024 年 10 月 29 日（火）12：00〜12：40　参加者 2 名
- 第４回：2024 年 10 月 29 日（火）15：00〜15：40　参加者 12 名
  （※　日本文化専門演習Ⅱ（丸島ゼミ）との共催）
- 第５回：2024 年 10 月 30 日（水）12：00〜12：40　参加者 3 名

学習内容：自己紹介と身近なことに関する簡単な質疑応答

日本語オンライン交流会に参加して

人文学部英米文化学科３年　**鬼頭　沙季**

私は、10月に韓国のカトリック関東大学校の大学生との日本語オンライン交流会に参加しました。この交流会に参加しようと思ったきっかけは、日本語教員養成課程を履修している中で、実際に日本語を外国語として学習する日本語学習者と交流し、実際の学習者の学習の様子や実態を知りたいと思っていたからです。また、元々韓国に興味があり、韓国語を学習していたことから、自分と同じように日本語を学んでいる韓国の大学生と交流してみたいと思ったからです。

この日本語交流会の内容は、数人のグループに分かれ、自己紹介とそのプロフィールについての質問・応答を私と韓国人の大学生同士で行うというものでした。クラスは初級レベルで、私のグループは日本語を学習し始めたばかりの人が多いという印象でした。この交流会をとおして、日本語学習者に対してその学習者に適するレベルの日本語を選択することの難しさを実感しました。普段の日本語養成課程に関する授業で、学習者に適するレベルの言葉や話すスピードを意識することが重要であると学習していたものの、実際に日本語が母国語ではない学習者に対してそれらを実行するのは非常に困難でした。また、近年来日する外国人が増加しており、「やさしい日本語」が重要視されていますが、日本語に不安を抱え来日する外国人の視点に立ちながら言葉を選んだり、接することの大切さを再認識することができました。今後もこのような機会があれば、積極的に参加したいと思います。



遠隔授業見学
（大阪大学日本語日本文化教育センター）

本課程では、2024 年度より大阪大学日本語日本文化教育センターが実施する日本語・日本文化教育研修共同利用拠点事業・教育実習指導事業に申請している。

年 4 回程度、拠点事業担当者による授業がオンラインで配信され、申請校の学生が見学することができる。また、授業後には授業担当者に質問する時間が設けられ、授業の工夫や留意点などについてたずねることができる。

2024 年度、本学からは秋冬期に実施された 2 回の配信に学生が参加した。詳細は以下のとおりである。

【2024 秋冬　第 1 回：通常授業配信】

・日時：2024 年 11 月 29 日（金）
　授業　14 時 15 分～15 時、質疑応答　15 時～15 時 50 分
・授業担当者：下村朱有美氏（大阪大学日本語日本文化教育センター）
・授業内容：初級漢字
・学習者数：9 名
・本学の見学学生数：3 名

【2024 秋冬　第 2 回：特別授業配信】

・日時：2024 年 12 月 17 日（火）
　授業　15 時 30 分～16 時 15 分、質疑応答　16 時 25 分～17 時 10 分
・授業担当者：下村朱有美氏（大阪大学日本語日本文化教育センター）
・授業内容：中級会話
・学習者数：5 名
・本学の見学学生数：2 名

北 海 学 園 大 学
日本語教員養成課程報告書　第 10 号

編　集　北海学園大学日本語教員養成課程委員会　（委員長　丸島 歩）
発行日　2025 年 3 月 31 日
発　行　北海学園大学日本語教員養成課程委員会
〒 062-8605　札幌市豊平区旭町 4 丁目 1 番 40 号
TEL（011）841-1161（内線）2295（丸島研究室）／ FAX（011）824-7729

